



ミカワツツジ

1、2019年度(令和元年)葦毛湿原の動物調査

昨年に引き続き、2020年3月末までの一年間、二の沢で自動撮影カメラによる動物の定点撮影を行い、2019年度の撮影回数は延べ85回でした。2018年度の撮影回数は延べ42回でしたので、撮影回数は2倍に増えました。二の沢は2018年度に伐採木の抜根作業を行い（葦毛通信 No. 80）明るく開けた裸地になり動物の生息環境が良くなったために増加したと思われま

す。動物は木の伐採直後の2016年度には147回と多く撮影されましたが、植物が繁茂し見通しが悪くなるに従って撮影回数が減りました。しかし、昨年度の抜根作業後は、2016年度の伐採直後と同様に明るく開けた環境になり、また動物の撮影回数が増えました。今後植物が復活すると予想して

表1 種別撮影回数一覧表

番号	種名	総数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	ニホンイノシシ	9					1		1	6				1
2	ニホンノウサギ	50	1	5		2	1	7	11	7	1	6	6	3
3	ホンドタヌキ	9					2		1		1	3	2	
4	ホンドキツネ	1										1		
5	ハクビシン	1												1
6	ニホンイタチ	8	1		1	1	1	1			3			
7	ホンドテン	3										2		1
8	ニホンリス	0												
9	ニホンアナグマ	0												
10	ヤマシギ	0												
11	コジュケイ	0												
12	ノネコ	0												
13	ニホンカモシカ	3							1	2				
14	ハシボソガラス	0												
15	ハシブトガラス	1					1							
16	不明	0												
	合計	85	2	5	1	3	6	8	14	15	5	12	8	6

ます。つまり、開けた裸地の状態が続くため動物の撮影回数は極端に減らず緩やかに減少し、撮影回数の減少程度は前回よりも抑えられると予想しています。

1) 調査方法

2019年度は、二の沢のT地点で引き続き撮影を継続しました。撮影は、昼間はカラー、夜間はモノクロになっています。これは、夜間撮影時にカラー撮影するためには、フラッシュが必要になるので動物を驚かさないようにして、継続して調査をするためです。

2) 調査結果

2019年度は延べ85回撮影されました。内訳は表1、図1・2の通りです。前年度の2018年度(葦毛通信 No. 82)と比較して撮影回数は約2倍に増えました。全体の傾向としては昨年と比較してニホンノウサギの撮影回数が約4倍に増えたのが大きく異なる点です。

まず、2019年度の撮影頻度は全体としては、2018年度は4月が10回で最も多く、8～10月にピークがあり、冬季は減りました。しかし、2019年度は4～7月が少なく、10・11月がピークになり、冬季も多くなっています。季節的なばらつきは2018年度とは大きく異なっています。これは昨年バックホーで抜根作業を行い植物の無い裸地状態に初期化されたため見通しが良くなり、春先から植物が発芽して復活するに従ってニホンノウサギがたびたび訪れるようになったためと考えられます。

撮影された動物の種類で最も多いのは、ニホンノウサギで50回(59%)撮影されました。昨年は12回(29%)だったので、回数は約4倍、割合は約2倍でかなり増えました。ニホンイノシシは9回(10%)で昨年の4回(10%)から回数は2倍、割合は同じでした。この2種類で全体の約70%になりますが、昨年の2倍近い割合まで増えています。

これ以外は、ホンドタヌキ9回(11%)、ニホンイタチ8回(10%)、ニホンカモシカ・ホンドテン3回(4%)、ホンドキツネ・ハクビシン・ハシブトガラス1回(1%)となっています。

撮影回数が昨年よりも約2倍に増えたのは裸地化して見通しが良くなったためと考えられます。特にニホンノウサギが大きく増えたのは、開けた草地という環境がニホンノウサギにとって適した環境であったためと考えられます。ニホンカモシカは昨年より撮影回数は減りましたが、日中でも湿原内に出没しており湿原の見学者が見る機会も増えていきます。しかし、今のところニホンカモシカによる深刻な食害は見られません。

次頁の写真は2019年度に撮影された主な動物です。ニホンノウサギは撮影されるのは夜だけで、昼間はほとんど撮影されません。ニホンカモシカは背後の山では子連れのみ

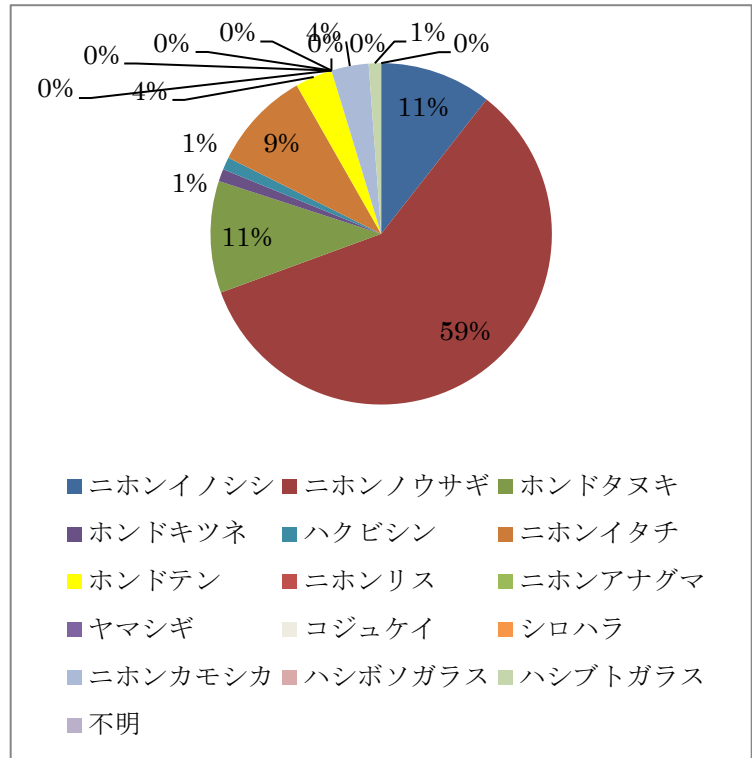


図1 種別撮影回数割合

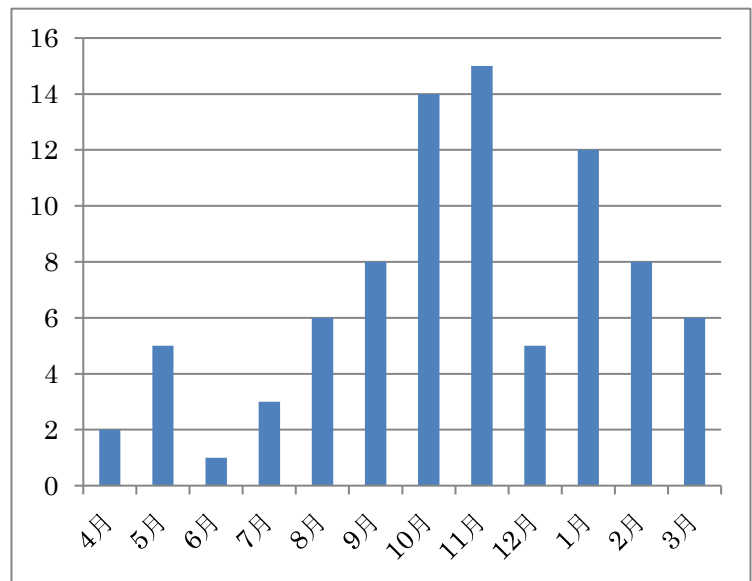


図2 月別撮影回数



ニホンノウサギ (2019年4月12日)



ニホンカモシカ (2019年10月16日)



ニホンイノシシ (2019年11月25日)



ニホンイノシシの瓜坊 (2019年8月4日)



ホンダヌキ (2019年12月15日)



皮膚病のホンダヌキ (2019年8月9日)

や、若い個体も観察されています。葦毛湿原の裏山は南アルプス赤石山脈の南端にあたり、この先は丘陵地になって太平洋へと続いています。つまり、ニホンカモシカは日本ア

ルプスから愛知県内の最南端まで分布域を広げたこととなります。

2018年度にホンダタヌキは撮影されませんでしたでしたが、2019年度は9回撮影されました。前頁写真のように皮膚病（疥癬症？）になって毛が抜けている個体も写っていました。ホンダタヌキは市街地にも進出しており、豊橋市役所がある豊橋公園内でも見られません。本来夜行性ですが、疥癬症になると目が見えなくなるのか、昼間でも出てきているのを見たことがあります。全身の毛が抜けて目が白濁し（白内障？）痛々しい姿でした。

ホンドキツネは、2018年度は4回撮影されましたが、2019年度は1回でした。タヌキとキツネの撮影回数は2016年度（12：1）、2017年度（12：1）、2018年度（0：4）、2019年度（9：1）となっています。タヌキの撮影回数が圧倒的に多く、キツネが撮影されるのは希です。また、2018年度にタヌキが撮影されなかった時にキツネが増えているのは何らかの相関関係があるのか単なる偶然なのかはわかりませんが、興味深い事実です。



ホンドキツネ（2020年1月5日）



ハシブトガラス（2019年8月17日）



ホンドテン（2020年1月4日）



ニホンイタチ（2019年12月20日）

ホンドテンとニホンイタチは動きが早く鮮明に映っておらず判別が難しい場合があります。ホンドテンは体長がやや大きく、頭部と耳が三角形で大きく、尾も太く先端が黒くなっているという特徴があります。ニホンイタチは小型で頭部と耳が小さく、尾も細いという点で区別しています。

葦毛湿原で確認できる動物はニホンノウサギとニホンイノシシが大半を占め、40～70%を占めています。その他ではキツネ、タヌキ、イタチ、テンが主に見られる動物です。

帰化動物としてはハクビシンやコジュケイが確認され、下流の長尾池から拡散したと思われるウシガエルが少数ですが葦毛湿原内の小さな池で繁殖していることが確認できたので駆除しています。まだ、アライグマは確認できていませんが、豊橋市北部の石巻山まで来ていることが確認されています。